

震災から現在，そして未来へ
～作業的存在としての姿を取り戻すための支援～

木田 佳和

介護老人保健施設 檜葉ときわ苑

東日本大震災や福島第一原発事故は、今まで暮らしてきた故郷を、今まで担ってきた役割を、今まで当たり前に行ってきた作業を、地域住民から理不尽なまでに奪い去った。震災の翌日に檜葉町からの避難を強いられた私達は、長期にわたる過酷な避難生活を経て、日本初となる仮設介護老人保健施設を立ち上げた。私達には、住み慣れた土地を追われ作業を奪われた被災者に、もう一度意味のある作業を取り戻すための支援ができる拠点を作らなければならないという強い思いがあった。当施設では、作業が可能な環境を整え、作業を中心とした取り組みを行うことで、前向きな語りの表出や生活に満足を示す利用者が増えている。その一方、帰郷できる目処が立たないことで、未来に希望を見出せない被災者も大勢いる。このような中で今の私達にできること、それは、被災者と未来に向かって『共に歩む』ことである。

作業科学研究, 8, 10-14, 2014.

The 17th Occupational Science Seminar, Special Lecture

**Moving on from the earthquake disaster to the present, and into the future:
Supporting the restoration of the self-identity of an occupational being**

Yoshikazu KIDA

Naraha Tokiwaen Elderly Nursing Home

The Great East Japan Earthquake and the accident at the Fukushima No.1 nuclear power plant ripped away outrageously from the people in the region the hometowns where they lived before, the roles they played before, and the occupations they engaged in as a matter of course before. We were forced to take refuge from Naraha the day after the earthquake and the life has been extremely severe since then. We built a temporary facility, which was the very first case in Japan. What prompted us to work on this project was our aspiration and strong awareness of the necessity to build a foothold facility, where the victims who had been expelled from their hometowns and robbed of their occupations, can enjoy more support to regain the occupations meaningful to them. We had paved the way for the facility, implementing occupation centered practice, and our efforts are manifested in the positive talks we hear. This has led to the increasing number of the facility patients showing the sense of fulfillment in their lives. On the other hand, there are a lot of the disaster victims who can't find any hope for the future, because nobody knows exactly when we can go back home. What we can do, under the circumstances is to be with the disaster victims side by side towards the future.

Japanese Journal of Occupational Science, 8, 10-14, 2014.

1. 檜葉町と檜葉ときわ苑

福島県双葉郡檜葉町は、人口約 7500 人（2013 年 11 月時点）を有し、太平洋側に面した温暖で自然豊かな町である。農業はこの地域の主要産業のひとつで、多くの家庭で田畑を所有している。収穫の時期に人手が足りない際には支え合い、収穫物をお裾分けするなど、農業は住民同士のつながりをもたらす、この地域に根付いた作業であった。

当施設は檜葉町初の介護老人保健施設として、2010 年 8 月 1 日にオープンした。この地域にはリハビリテーション関連サービスがなかったこともあり、当施設に対する地域の期待度は高く、オープン当初は慌ただしい毎日の連続だった。私は同年 12 月に副施設長に就任した。開設間もない施設の運営に携わる中で、困難な場面に遭遇することは多々あったが、一から施設を作り上げることができる喜びを味わいながら、自分達が理想とする姿を目指して、仲間達と共に日々の業務に励んできた。

関係各位や地域の人々に支えられ、徐々に運営が軌道に乗ってきた矢先の 2011 年 3 月 11 日、あの瞬間から、希望に満ち溢れていたそれまでの日常が一変することとなった。

2. 被災

震度 6 強。緊急地震速報のアラーム音が施設中に響き渡って数秒後、何かに掴まらないと立ち続けることができないほどの、今までに経験したことのない激しい揺れに襲われた。棚や机から激しく物が崩れ落ちる中、私は倒れないように必死に手すりにしがみつकिながら、利用者のもとへ向かった。揺れが弱まり施設内外の状況を確認すると、幸いなことに、利用者・職員に怪我などの人的被害はなく、建物の損壊も免れた。しかし、大地震の影響で電気・水道・ガスなどのライフラインは完全に寸断されてしまった。

そして、激しい揺れから数十分後、更なる出来事が町を襲った。高さ十数メートルにも及ぶ津波である。当施設は高台に位置したため津波の被害は免れたが、荒れ狂う波は河川を逆流しながら木々や家屋を次々となぎ倒し、沿岸の一部集落は瞬く間に波に呑み込まれて壊滅してしまった。私の中で「ここで死ぬかもしれない」という、生まれて初めて抱く死が間近に迫っているイメージが一瞬脳裏を過ったが、不安で身を寄せ合っている利用者のために、全職員が一丸となってケアに奮闘した。

夜になり多少は落ち着きを取り戻したが、利用者や

職員を守るために何ができるのか、いくら考えても明確な答えは出せず、数えきれないほどの余震が続いたこともあり、私は思考が整理できないまま眠れぬ夜を過ごした。

「原発が爆発するかもしれない」

翌朝、衝撃的な言葉が施設を訪れた役場職員から伝えられ、福島第一原子力発電所から 20km 圏内に位置する檜葉町全域に避難指示が発令された。私達、利用者 88 名・職員 37 名は、役場職員の誘導のもと、檜葉町から 40km ほど南にあるいわき市の避難所に向かった。

避難所となった小学校は、避難者で溢れかえり大混乱となっていた。避難所では電力は供給されていたものの、水が使えず食料の確保もままならない状況であった。毛布や衣類の配給も十分でない中、私達は使用を許可された教室で利用者のケアを開始した。その場所は、冷たい教室の床に段ボールと毛布を敷き詰めて、そこで要介護高齢者が雑魚寝を強いられるような過酷な環境であった。

このような状況での生活が数日続くと、利用者にある変化が現れた。活動性の著しい低下である。会話が減り感情を表出することなく床や椅子に座り無為に過ごすなど、自身の意志を發揮して行動する利用者が極端に減っていった。避難所での生活は、マズローの欲求段階説でいう、生理的欲求や安全欲求などの下位欲求ですら満たされない状況にあった。前日まで何気ない日常を送っていたにも関わらず、住み慣れた環境や当たり前存在した作業を突然奪われた利用者は、心身とも急激に衰弱していったのである。

この環境から抜け出さなければ、利用者が死に至ることは容易に想像できた。私達はあらゆるつてを使い、利用者の受け入れ先探しに奔走した。そして、いわき市近隣の地で数日の避難生活をした後、同法人の施設内で受け入れ体制が整ったため、避難所を後にした。

3. 作業と環境への支援

喉が渴いたら水が飲める、朝・昼・晩に食事を食べられる、ベッドで寝ることができる。現代ではごく当たり前の作業がこの環境には存在していた。被災して奪われた作業を再び獲得できた喜びは、過酷な避難生活を経験した私達にとって、ひと際格別な瞬間であった。しかし、当たり前の作業の一部を再獲得し、被災当初に比べて下位欲求は満たされたものの、ここでは施設の定員数を超えた状態での生活を送らなければならなかった。ホールや廊下などの生活スペースが狭く、

利用者の行動が制限されてしまう環境であった。車椅子を自操できる能力がある利用者でも、自分の意志で自由に動き回ることができず、移動するために職員の手を借りるような場面も少なくなかった。

また、寛ぐ場所であるはずの居室は、本来個室である部屋にベッドを2台設置して2人部屋として使用しなければならなかった。部屋にテレビを置くこともできず、カーテンでベッド周囲を仕切ることすらできない、プライバシーの確保が困難な空間であった。



図1 プライバシーの確保が困難な居室

教室での過酷な避難生活よりは生活環境が幾分向上したことで、三度の食事を摂る、入浴する、手芸をする、本や新聞を読むなど、被災により奪われた作業の一部を取り戻すことはできた。しかし、日常生活の中に何らかの作業は存在していたにも関わらず、日中を無為に過ごし、個別に作業を勧めても他者の目を気にして行おうとしない利用者が多く見受けられた。被災当初よりは作業に従事できる環境ではあったが、この場所には利用者がより良く生きるための作業が、ほとんど存在していないと感じた。

そこで、私達は被災地域に根付いていた作業である農業ができる機会を設けるべく、プランターで育てることができる花や野菜を用意し、土に触れる機会を提供することにした。

作業を始めると、利用者の表情や言動に今までになかった著明な変化が現れた。利用者の生活の一部であった作業に従事することで、多くの笑顔、語り、そして、活気のある雰囲気が生み出されたのである。当施設の利用者にとって、土に触れる作業は特別で意味のある作業であるということを改めて認識したと同時に、作業が人の健康に寄与する可能性を感じた瞬間でもあ

った。

被災した利用者を支援していくうえで、作業の必要性を再認識した私達は、各職種が協力して利用者の想いを知るためのインタビューを行うことにした。どのような想いを抱いて毎日を過ごしているのか、意味のある作業は何かなどを知ることで、その方らしさを少しでも取り戻すための支援をしなければならないという強い思いがあった。いざインタビューを始めると、震災前の生活や避難中の思いなど、多くの利用者は話を止めようとせず、止め処なく言葉が溢れた。インタビュー中に涙を流しながら想いを打ち明ける利用者も少なくなかった。

そのような中、ある利用者は「避難生活中だから、想いを打ち明けてはいけないと思った」と語った。利用者は、自らの想いを押し殺して生活していたのである。自分達は故郷に帰れず避難中の身だから、贅沢なことを言うてはいけないというような感覚に支配されていた。加えて、この頃は職員数が十分ではなかったこともあり、職員の都合に合わせた業務の流れを構築せざるを得ない状況にあった。インタビューを通して、いつの間にか職員中心の日常が当たり前になっていたことに気付かされた。

被災直後よりは良い環境で、何らかの作業はある。しかし、定員数を超過し、また、職員中心の業務をせざるを得なかった環境での支援は、作業の遂行・創出を制限するどころか、想いの表出までも制限していたのである。

原発事故の影響で避難生活の長期化が予想されたため、私達は本当の意味で、利用者が安心して健康的に生活することができる環境の整備、および、作業を奪われた利用者には、作業的存在としての姿を取り戻すための支援をしていく決意をした。

まずは、サービスのあり方を根本的に見直すために、『利用者様中心のサービスを徹底し、利用者様やご家族、地域が元気になるような支援を実践いたします』という基本方針を新たに掲げた。職員中心ではなく、利用者中心の支援を行う宣言をしたのである。利用者が日々どのような想いで暮らしているのか、どのようになりたいと思っているのか、各人にとって意味のある作業は何なのかを知る努力を継続していくことを職員に示した。

次に、被災してからの支援の中で、環境が人の作業遂行に多大な影響を及ぼすことを痛感していたので、意味のある作業の獲得を継続して支援できる施設を新たに建設する決意をした。意味のある作業に従事でき

る環境整備なしに、本来の意味での健康的な姿を取り戻すことができないという思いがあった。

作業を遂行できる環境を整備するために、私達は震災以降に提示された「東日本大震災に係る社会福祉施設等災害復旧費の国庫補助」の取得を目指して動き始めた。申請作業を進めていく中で、その条文の内容には被災地の現状にそぐわない条件が複数存在していることを知った。そのため、私達は現状に即した制度の改正を求めて、国会や厚生労働省に陳情に赴き、被災地の現状や、作業・環境を奪われ作業的に不公正な状態にある利用者の健康被害を訴えた。また、作業の可能性を導く手段として、利用者への直接的な支援だけではなく、作業的公正の視点から利用者の権利を代弁し、条文の変更を求めた。利用者の作業的公正を実現できるよう努めた結果、後の一部改正につなげることができた。

被災から2年が経過した2013年3月、私達は日本初となる仮設介護老人保健施設を開設することができた。施設の名称には仮設という冠が付く。これは、本来の施設はあくまで檜葉町にある施設で、帰郷できる日が来るまで共に過ごす仮住まいの施設という意味が込められている。

環境が整備されたことで、利用者は自らの意志を発揮して施設の中を思いのままに動き回り、施設の至る所で利用者同士や家族との交流を楽しむ場面が見られるようになった。また、作業に焦点を当てた介入を行うことによって、意味のある作業の創出が可能になり、生活に満足を示す利用者が少しずつ増えてきている。

4. 未来へ向けて

震災以降、居住が制限されている(2013年11月時点)檜葉町は、田畑は荒れ果て、雑草が生い茂った状態で放置されている。津波で破壊された家屋、流された車が震災当時のまま残されている場所もある。地域住民が居住することが許されていないこの地域は、あの時から時間が止まったままである。

そして、震災前にはなかった特殊な風景が被災地に広がっている。原発事故により飛散した放射性物質が付着したゴミや土など、放射性廃棄物の入ったおびただしい数の除染袋が、平地に山のように積み重ねられているのである。これらは、未だ保管場所が建設されていないため、このような風景が、檜葉町をはじめとした原発周辺地域の至る所に広がっている。

ある利用者は「檜葉町に行きたい気持ちはあるけれど、檜葉町の現状をこの目で見るのが怖い」「現状を目



図2 平地に山積みされた除染袋

の当たりにしたとき、自分がどうなってしまうか分からない。現状を受け止めきれないかもしれない」と語った。行き場のない廃棄物が山積みになっていることはメディアなどの情報で利用者にも知られているが、「もう自分達が暮らしていた頃の檜葉町とは違う」「どんなに環境が整ったとしても、震災前の生活には戻れない。それは理解しているけれど、現実を受け止めたくない」「檜葉町で生活しているイメージが湧かない。未来に向かって何をしたいか分からない」など、現実を理解していながらも、心の葛藤に苦しむ利用者・被災者は少なくない。

意味のある作業の遂行を可能にすることは、被災者のQOL向上に貢献できる可能性がある。そして、作業の可能性を実現するためには環境の整備も必要で、人・作業・環境の関係性に配慮しながら進めていくことが大切である。しかし、このような取り組みをしていても、心の整理ができない被災者は多い。原発事故の影響で帰郷できる目処は未だに立たず、希望ある未来を見出せずに不安な日々を過ごす被災者、前に進むことができない被災者は大勢いるのである。

このような現状の中で被災者のために自分達ができること、それは未来に向かって『共に歩む』ことなのだとは私に思っている。苦しんでいるときに寄り添って想いを分かち合い、解決方法を共に考え、お互いが納得したうえで、未来に向かって共に歩んでいくような支援が必要であると感じている。原発事故が周辺地域に与えた被害は甚大で、現時点で被災地の未来を予測することは困難な状況にある。今後も自分達の予測もつかない事態が起こるかもしれない。目の前で起こる事象によって生まれる感情は様々で、そして、その時々

で価値観や意味のある作業も変化していく。だから私達には、被災者と共に歩み、彼らが新たな作業を必要としたときに、それらを可能にするための支援が求められる。

とくに高齢者は、新たな環境への適応や、そのときの価値観・想いなどを踏まえた作業の創出に時間を要する。避難先の環境に適応できず、引きこもりになり日中を無為に過ごす方も少なくない。避難生活が長期化することが原因で、要介護認定者が増加している現状もある。それゆえに未来に向かって『共に歩む』という姿勢が被災地支援に求められるひとつの姿なのだと思う。

被災者は、今まで当たり前に行っていた作業や住み慣れた環境を理不尽なまでに奪われた。人の日常は作業で満たされており、それらが奪われることで健康ではなくなる。しかし、その作業にまつわる想いを踏まえて環境や作業を提供できれば、人は健康を取り戻すことができる可能性が高くなる。過酷な避難生活や被災者支援を経験して、人・作業・環境は密接に関係していると改めて感じた。これからも利用者中心で、未来に向かって『共に歩む』支援を継続し、被災者や被

災地の復興のために尽力していきたい。

私達は被災者と共に歩み続ける。

謝辞

被災してから現在に至るまで、多くの方々から激励のお言葉や温かなご支援をいただきましたことを、この場を借りて心より感謝申し上げます。

文献

Maslow, A.H. (小口忠彦・訳) (1987). *人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ* 改訂新版. 産能大出版部.

吉川ひろみ (2008). 『作業』って何だろう. 医歯薬出版.

日本経済新聞 (2012.9.10). 被災3県, 要介護認定11万人. 震災前から12%増. <

http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0800L_Q2A910C1CR0000/>参照日 2014.10.28.

Townsend, E., Polatajko, H.J. (編著), 吉川ひろみ・吉野英子 (監訳) (2011). *続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正*. 大学教育出版.